

成績はレポートで評価し、試験は実施しなかった。レポートは、自分が立てた仮説を、自分で作成・収集したデータを用いて、重回帰分析などにより検定し、結果を報告するものである。詳細は以下の通りである。なおこれをいきなり書かせるわけではなく、これに先立ち1度、準備的なレポートを提出させている。なお分析には R という統計ソフトを使用した。

■ レポートの構成

1 理論

自分が関心を持ち、データを用いて検証したい理論について、1、2段落（400～800字）ぐらいの長さで、説明する。理論とは、観察不可能な因果関係である。仮説を練ることが第1レポートで最も重要な目的である。それ以外の、前置きなどは要らない。

文献または論文を2つ以上参照し、その箇所に註を付し、その書誌を末尾に記すこと。丸ごと読む必要はなく、要は複数の異なる考え方に触れ、アイディアを得ることが目的である。できればであるが、これまで言われてきたのとは反対の結果、あるいは論争的な問題に対して一定の答えが出せると、極めてすぐれたレポートになる。

なお自然実験を用いるレポートは高く評価する。

2 仮説

上の理論から導かれる観察可能な含意を書く。説明変数もしくは被説明変数が、政治に関わるもの（政府の人事や政府の決める政策など）でなくてはならない。

（1）被説明変数（1つ）は何かを書く。

（2）説明変数は何かを書く。続いて、説明変数が被説明変数を増やすのか減らすのかという仮説を明記する。説明変数は原則として1つだが、2つ以上ある場合は、段落を分ける。

（3）制御変数は複数あるので、それぞれ段落を分ける（多いほど望ましい。基準として5～6個ほど）。まずある制御変数が何かを書く。続いて、その制御変数が被説明変数を増やすのか減らすのかという予想を明記する。

また各変数に次のような記号を前置きすること。

D-1 被説明変数となる1番目の概念（1番目のみ）

I-1 説明変数となる1番目の概念（原則として1つだが、2つ目以降があればI-2などのようにする）

C-3 制御変数となる3番目の概念

3 データ

はじめに観測単位（データの1行が何に対応しているか。都道府県、年、選挙区、議員、など）と観測数を書く（年など、必要なら範囲も書く）。なおデータの年次はなるべく全ての指標で揃え、その年次をここで明記すること（揃わない変数についてはコードブックに理由とともに明記）。

(0) 識別番号の割り当て規則

(1) 被説明変数

(2) 説明変数

(3) 制御変数

これら3つの変数群に分けて、さらに概念ごとに分けて、それらを測定する指標ごとに、次の様式でコードブックを簡条書きすること（それぞれ改行すること）。指標と指標の間は1行空けること。

指標の通し番号

指標名

操作的定義

典拠資料から加工して使う場合は、加工方法を記す。

典拠資料をそのまま場合は、その指標の定義を記す。

単位（量的変数のみ）

欠損値処理方針（欠損値がある場合のみ）

典拠資料（参考文献と同様の書誌情報）

計量分析は必ずしも期待通りにうまくいかないので、1つの指標が失敗してもいいように、保険をかけて1つの概念に対して複数の指標を用意すること。同じ理由で、制御変数の数も多い方がよい。指標の個数（つまりデータの列の数）は多い方が自分のためであるが、少なくとも10個以上調べること。

他の指標から計算して得られた指標は数えない（例えば予算と人口の変数から、一人あたりの予算を計算しても、指標の個数は3個ではなく2個のまま）

同じ指標の複数の年度を取り上げても、特別な理由がない限り、1つと数える

1種類のカテゴリーの複数のダミー変数はまとめて1つと数える

・指標の通し番号は次のように振ること。

D-1-2-2 被説明変数となる1番目の概念を計測する2番目の指標で、指標の通し番号が2番

I-1-3-5 説明変数となる1番目の概念を計測する3番目の指標で、指標の通し番号が5番

C-5-4-32 制御変数とな5番目の概念を計測する4番目の指標で、指標の通し番号が32番

4 分析

重回帰分析により、仮説を検定する。独立変数の組み合わせをなるべく多く試してみても（そのためには変数が多い方がよい）、最も仮説に合致し、有意な指標が多い分析結果を1つ報告すること。5%水準で有意な変数1つにつき5点の素点を追加する（但し最大15点まで）。次いで、その結果が頑健であるか否かを示すために、独立変数の組み合わせを変えたものをあと2つ報告すること。

有意な変数が1つもない場合は、有意な変数が出ただろうと事前に考えていた独立変数の組み合わせ3つにつき、分析結果を報告すること。

分析結果につき、独立変数ごとに（まず説明変数、次いで制御変数）、有意か否か、有意であれば、独立変数が1単位増えるごとに被説明変数がどれほど変化するか（増えるか、減るか）、を説明すること。

以上を踏まえて、仮説が支持されたか否かを述べ、他に特に考察すべきことがあればそれについて書くこと。特に、仮説が支持されなかった場合は、どのような理由が考えられるかを論じること。感想は要らない。

分析結果の表は、ここでは例えば

＜表 1 このあたり＞

のように参照するにとどめ、表自体は後述するように参考文献の後に置くこと（文中に表を付けると推敲の過程で位置が変わることがあり、面倒だから）。

データの散布図や回帰直線などの図は要らない。データも出力しないこと。

5 参考文献

別紙「レポートの書き方」の要領で書誌情報を書くこと（上記 1～3 に関するもの。統計分析に関するものは除く）。参考文献に依拠した箇所については、必ず註で明記すること。

6 表

R の出力そのままではなく、講義の第 3 章第 3 節で説明するように、エクセルに貼り付けて整序すること（適宜四捨五入すること）。1 頁につき表 1 つ。